

「エステル ―この時のために―」・登場人物表

エステル	実名をハダッサという。父母を亡くしモルデカイに育てられた。
モルデカイ	捕囚の民として連れて来られた。イスラエルでは宮廷で重要な地位にあったが、帰還後は教師として若者を教えている。侍従たちの何人かは元生徒。
アハシェロス王	ペルシア帝国の王。ギリシアとの戦争で父と二人の兄も亡くした。理想が高く、曲がったことが嫌い。
ワシュティ	王の宴会に顔を出すことを拒んだために離縁された王妃
ハマニ	大臣たちの勢力を抑えるために、宰相に任命された。

メホマン
ビズタ
ハルボナ
ビグタ
アバグタ
ゼタル
カルカス

カルシナ
セタル
アデマタ
タルシシ
メレス
マルセナ
メムカン

地方官吏

婦人1
婦人2
婦人3

書記官

ハガイ
エリアス

シリーン

サマン
ゴルネーサ
パリー
ナヒッド
パヴィーナ

庭師 1
庭師 2

あらすじ

ペルシア帝国では征服地から連れて来られた様々な民族が帰還民となって暮らしていた。各民族の伝統や文化を重んじるという先王の統治方法を継承し、推進しようとするアハシェロス王。隙あらば、昔のやり方に戻したいメディア・ペルシャの大臣たちは、王妃ワシュティを追い出した後、全国から公平に選んだと見せかけて、自分たちの娘をお妃にして影響を与えようと企むが、選ばれたのは侍従たちの推薦した恩師の娘であるエステルであった。

娘を心配して門番の詰所に住み込んだモルデカイは、王の部屋の扉係の暗殺計画を知りエステルに知らせ、その計画の裏にけしかけた大臣がいたことも分かった。その後、王は大臣たちの権限を制限するために、古くからの大臣たちとは全く関係のないハマンを昇進させた。実力以上に貴ばれようとするハマンは、自分に頭を下げないモルデカイに腹を立て、王に求められた徴税を達成出来ないのを埋め合わせる必要もかねて思いついたのが、モルデカイの民族を皆殺しにして財産を奪うことだった。

エステルは王様の前で自分の出身を明かすことを決心し、ハマンの悪事を暴く。ハマンは捕らえられ、敵であるモルデカイを吊るそうとして立てた竿に吊るされた。

1. 王の宴会

1. 離縁された王妃

古代ペルシアの首都スーサ、王の宮殿の園の庭。白綿布の垂れ幕、青色のとばり、紫色の細布のひもで銀の輪及び大理石の柱に繋がれている。舞台を左右に分けて、右側中央に王、左側中央に王妃が座り、大臣たち、大臣の妻たちが両端に向かいあうようにして座り、左右でライトが切り替えられる。上手半分のライトが点灯。

王の椅子を中央に7人の大臣（カルシナ、セタル、アデマタ、タルシシ、メレス、マルセナ、メムカン）金銀の…長椅子にどっかりと座っている。

王の後ろに7人の侍従（メホマン、ビズタ、ハルボナ、ビグタ、アバグタ、ゼタル、カルカス）が仕えている。

アハシェロス王

「ペルシアに忠誠を誓った127の州、都市の家臣が一同に会すということは大いなる恵みである。

あなたたちの仕事は、それぞれの領域の王の道の安全を守ることである。私利私欲を求めず、このことに集中せよ。国の法律に従い、それぞれの州や民族の習慣を考慮して公平に民を裁け。

わたしは、民族や家柄よりも能力を重んじる。王の目から隠れられると思うな。不正があれば王の耳に伝えよ。諦めて自らも不正を犯す者となるようなことがあってはならない。王の要塞はいつでも出動できるようになっている。」

(地方官たちの声) 「王様万歳！」 「王様万歳！」

「まさにそれです我々に必要なのは！わたしたちは喜んで従います！」

「もう、身内の戦争はたくさんだ。王様万歳！総督府万歳！」

アハシェロス王

（金の盃を手にとり）「皆、好きな盃をとれ。酒を飲まぬ習慣にある者は無理に飲まずとも好い。好きなものを心行くまで飲むが良い」

（上手から、王の座の前には王からの積を受けるための行列と一人一人挨拶する。様々な伝統衣装を着て、様々な挨拶が続く）

（下手、大臣たち）

タルシシ

（メムカンと酌み交わしながら）「やれやれ、また挨拶からだ。地方官まで集めて酒宴を催すとは。」

アマデタ

「王様は全くこの大帝国を治めるのにふさわしいお方だ。なんとという広い度量をお持ちであることだろう。」

マルシナ

「縛り付けるのでなく受入れ、厳しくするところは厳しくする。まさに、望ましい王様です。」

セタル

「世襲を禁じたのも、監視役を置くことも、前々王のダレヨス王の頃からの方針ではありますが、なかなか徹底することが難しかった。しかし、大胆にこれを徹底しようとしていらっしゃる。」

メムカン

「異邦人でも優秀なものがあれば取り上げる。それは地方ではいいかもしれませんがね。但し、ここスサでとなると話は別ですね。先々代からの功労者である貴族や私たちを差し置いてというわけにはいきませんね。」

タルシシ

「いくら多民族国家といっても、国を仕切る側に外国人が増えるというのは、かえって安全とはいえませんな。」

メムカン

「ことに 王妃のワシュティ様。確かに美しいが、ご自分の同族の者ばかり傍において、俺たちとは話をしよう

ともなさらない。未だに公用語があまりお得意でない。」

タルシシ 「アハシェロス様が即位すると分かっていたらペルシア人から王妃を探したものを。」

メムカン 「全くですよ。」

メレス 「てっきり婿様のマルドニオス様かと」

タルシシ 「そうならなければまだ我々が尊敬されたものを。」

メムカン (タルシシの耳元で何か囁き、ニヤッと笑い、王の前で順番を待っているひとりの男に合図をする)

地方官吏1 「皆様、私は帝国の西の端からやって参りました。立派な宮殿の、心の底から金の杯で王様の酒を好きなだけ振る舞って下さって大変、感激しております。王様の盛んな国の富と王威の輝きがいつまでも続きますように。王様、ひとつお願いを申し上げます。噂には聞いております。美しいお妃様にもご挨拶させていただきませんか。」

(一同、はやし立てる)

アハシェロス王 (いさめて) 「宜しい。お前の言う通りにしよう。」

(一同、喝采)

アハシェロス王 「王妃ワシュティに冠をつけてここに来させよ」

侍従 「畏まりましてございます。」

2. 婦人の宴会の場

(歓声の声が続く中、下手側のランプ点灯)

ワシュティを中央に大臣の妻たち、婦人1, 2, 3、が並んでいる。

浮かび上がる婦人たちの濃い化粧、無表情な固い顔

婦人1 「まあまた何か始まったようよ。」

婦人2 「いったいあと何日続くというのでしょうか」

婦人1 「酒蔵を空っぽにするまで帰る気はなさそうだわ。」

婦人3 「せっかく遠くから来たのだから、

婦人3 「王様の宴会といってもピンキリですわね。本日の宴会はなんと下品なことでしょう。」

婦人2 「王様は、野蛮な民族の出身者でも何でも構わず国中から人を集めるのがお好きですからね。マナーの悪い人たちがたくさん集まっていけません。全王様の頃はまだこれ程ではなかったのに。」

婦人3 「国が大きくなるのは結構ですけども、やはりペルシア人の国なのにペルシア人が大事にされないとは、おかしなことですわ。」

婦人2 (ワシュティにわざと聞こえるように) 「アハシェロス様が王位を継がれると分かっていたら、必ずペルシア人のお妃を迎えたでしょうって主人も言っておりますわ。」

婦人1 「そうですわね、出身が同じお仲間ばかりをひいきにされるのでは亀裂が生じますわ。そういうところを丸く収めるのが私たち婦人の務めですのにね。」

婦人2 「わたくしアハシェロス様がお可哀そうでなりませんわ。」

王妃ワシュティにわざと聞こえるように。

ワシュティ何か言いたげな視線をかえす。やや距離をおいたままのらみ合い。

侍従 「お妃様！申し上げます。」

ワシュティ 「何ですか？」

侍従 「王様がお呼びでございます。冠をお付けになり王様の前にお越し下さい。」

婦人1 (ひそひそと聞こえるように) 「まあ、冠をお付けになってですって。外国からのお客様ならばまだしも、家臣ばかりを集めた宴会に、わざわざ冠をつけるとは何だか大げさですわね オホホ。」

婦人2 「まあ。地方から集まった総督や侍臣たちのことですから品の悪い質問をして、お妃さまが困るのをみて大笑いするに違いありませんわ。お妃様はあまり公用語おできになりませんからね。」

(婦人たち集まってヒソヒソと。ワシュティの顔が真っ赤になる)

ワシュティ (使いに) 「…王様には、気分がよくないのでお答え出来ない。と伝えて下さい。」

侍従 「お妃さま。王様のご命令ですのでどうか…」

ワシュティ (怒りに震え顔を赤くしながら) 「構いません。わたくしにだって。わたくしにだって。そのくらいの権利はあるはずです。」

侍従 「畏まりましてございます。」

3. 再び王の宴会の席

侍従の動きをスポットライトが追う。

下手のランプが消えて、上手のランプが点灯。

中央の椅子に座るアハシェロス王に近寄り、耳打ち。

マルセナ (侍従に) 「いかがなされましたかな。王妃は。」

メレス 「侍従からの正式な呼出しだということにお出ましにならないというのですか。」

アデマタ 「まさか。王様の命令だということのに。」

タルシシ 「王様の命令に逆らうとは例えお妃様でも。」

MEMKAN 「全ての大臣及び国中の家臣の前でまさか王妃様ともあろうお方がそのような態度では困りますな。」

タルシシ 「王様のご意思に沿わないですな。」

MEMKAN 「これはいけませんな。はるばる遠くからやってきた忠臣たちに対して、王妃様がこのような態度を見せるとは。悪い手本になってしまう。」

タルシシ 「このような王妃様の態度をそのままにしてはなりません。国中の全ての女が、夫の命令をよしとしなくてもよいと教えているようなものではありませんか。」

MEMKAN 「決して、決してこのことをうやむやにするようなことがあってはなりません。王妃を国に返し、王の命令により、妻は夫の言いつけに従うよう、新しい法律を作り、そして王妃の位を彼女にまさる他の者に与えるべきです。」

タルシシ 「新しい王妃様には、是非とも全国から美しい乙女たちを集め、見栄えだけでなく、性質も、最も優れた者を選びになりますよう。」

大臣たち 「そうです王様。法律で厳しく定めるべきです」

アハシェロス王 「宜しい。それでは、そのように計らえ。」

タルシシ 「畏まりましてございます。仰せの通りに。」 (MEMKANと顔を見合わせ、ニヤリ)

4 書記室

メレス、タルシン、MEMKAN。国中に送る草稿の準備をしている。
侍従の一人が書記をしている。

タルシン	「まず、この法律は.. 帝国の拡大につれて増加している、異民族との結婚における夫婦関係について定めるものである、と書け。」
侍従	「はい。」
タルシン	「それから、妻たるものは、家庭内において使用する言語は全て夫の国の言語を用いること、書け。」
侍従	はい。
メムカン	「ワシュティ王妃は、王の命令に従わず、宴会の席に座ることを拒んだため、今後、二度と王の前に現れてはならないこととなった。全ての国民は王に倣い、妻たるものは家庭において、男子たるものよりも高くあってはならない…これを法律とする。」
侍従	「はい。それでは、これを各州にその文字に従い、各民族にはその言語に従って、書き送ります。王様から必ずそうするように言われていますから。」
タルシン	「まあ適当にやっておけ」
メレス	「ところで、新しい王妃は本当に国中から平等に選ぶのですかな？」
タルシン	「なに、州の端から端まで 127 州もあるというのにそんなことが出来るわけがないだろう。また王が異国の女を選んだらならまた面倒なことだ。」
メムカン	「異邦人の娘を王宮の婦人の間に入れるのは伝統としてよくない。ともかくペルシア人かメディア人の娘がのぞましい。」
侍従	「王様とのお約束は全国から募るようにとのことでしたが。」
タルシン	「それは詔の端っこの方に小さく書いとけばいい。州府の奴らが卑しいことを企むとことだからな。写しは 1 枚だけでいい。あまり目立つところには貼り付けるな。これを足すがよい。」

侍従	「何ですかこれは？」
タルシシ	「薄め液だよ。読めないように少し水をかけておけ。」
侍従	「いけません。滲んで読めなくなってしまうです。」
メムカン	「構わぬ。私が王の印を預かっているのだ。」
タルシシ	「ともかくこれを貼り出せば、全国には伝えたことになる。やれやれ、あとは、ペルシア、メディア人の娘から見栄えのいい娘を探すだけだ。」
メレス	「うちにも娘がおりましてね」（ニヤリ） （一同、顔を見合わせる）

2. モルデカイの家

モルデカイを中心に、王の侍従である、メホマン、ビスタ、ハルボナが座っている。

メホマン	「モルデカイさん、今日国中に出された法律についてあなたのご意見が聞きたくてここに来ました。」 （ハルボナが一枚の紙をモルデカイに差し出す）
ビスタ	「ペルシアやメディア人の古くからの大臣たちの中には、以前からワシュティ様を追い出したがって居ましたが、ついに成功してしまったのです。」
ビスタ	「奥方たちと組んでわざと仕組んだのです。お可哀そうに」
メホマン	「守って差し上げることが出来なかったのが悔やまれます」
モルデカイ	「まあ過ぎたことは仕方がない。我々に出来ることと言えば新しいお妃選びは、大臣らの思惑通りにさせないことだ。」

メホマン 「その件なのですが、王様との約束では、各州から家柄や民族を問わず最も優れた者を募るということになっていますが、大臣たちは、内々に自分たちの娘だけをお妃候補にしようと企んでいるのです。」

ビスタ 「そうか。王様のご機嫌をとるような言い方をしたのも策略のうちだったのか。」

メホマン 「王様もそのことは気を付けていらっしゃいます。ですから、お妃選びの責任者にはハガイ様をご指名されています。」

モルデカイ 「うむ。ハガイ様に任されているのならまだ希望がある。あの方は永く王家に仕えていて信頼のおける人だ。決して賄賂をもらって下手な娘を王に推薦したりするようなことはない。」

メホマン 「ただし、候補者全員が、大臣たちの息のかかった娘たちであれば何の意味もありません。そこで、相談があります」

ハルボナ 「推薦状は私たちが何とか手に入れますから、ハダッサをハガイ様のところに送ってくださいませんか。」

ビスタ 「ハダッサなら、きっと王様の御心に叶うはずです。」

モルデカイ 「ハハハハハ。そんなことを考えるものではない。ハダッサは、わたしら民族のやり方でわたしが育てた我が民族の心を持った娘だ。我が民族は血筋を大切にす民族だ。王様だろうが何だろうが、異教徒の男に嫁がせることだけはあり得ない。」

ハルボナ 「そうですね。無理にとは申しません」

ビスタ 「しかし、このままでは王様は大臣たちの言いなりに…」

メホマン 「…そんなことはないさ、そんな候補者ばかりなら、王様は、誰も選ばれないだろう」

エステル 「待って下さい。わたし行くわ。わたしも本当は、皆さんのようにこの国のお役に立ちたいと思っていました…生れや民族で差別されないだなんて…女のわたしに、そんなチャンスが他にあるのでしょうか。」

モルデカイ 「余計なことに首を突っ込むものではない。誰がお前を役立たずだなんて言ったことがあるか。」

ハルボナ 「ありがとうハダッサ。でも、モルデカイさんの言う通りです。どうぞ僕たちの言ったことは気にしないで下さい。わたくしたちはこれで失礼致します。」

モルデカイ 「気をつけてな。ここに来たことは誰にも知られておるまいな。王様の侍従の中に、占領地から連れて来られた民族の出身の者がいるということを誰にも悟られぬようにな。いくら王様が気に欠けぬと言われても、わたしたちの出身を知ったら必ず妨害してくる奴らが必ずいるのだから。知られることは決してお前たちの役にはたたぬ。」

ハルボナ 「大丈夫です。あなたも、どうか御体に気をつけて。」

3. お妃候補

お妃候補者が集められた婦人の間。ハガイとエリアスが候補者のリストを見ながら歩いている。

ハガイ 「国中から探すという王様の言葉だからな。どんなにたくさん集まるのだろうかと思ったらなんと少ないことだ。」

エリアス 「はい。来る者は全て受入れましたが。やはり、王妃になれる補償もないのに、はるばる遠くへ若い娘をやるような父親はなかなかおりませんのでしょうか。確かに、侍従をお探しになられる場合は全ての州の全ての国民から最も優秀な者を選ぶという方法は宜しかったかもしれませんが。同じ方法で、お妃を選ぶというのは、どうなのでしょうね。」

ハガイ 「王は新しいお方だ。絶対に強いお方だ。昔ながらの政略結婚など決して受入れはしない。王様のご意思を汲ん

で働くのがわたしたちの役目。それで王様はこのお妃選
びの件をハガイに一任された」

エリアス

「はい、おっしゃる通りでございます」

ハガイ

「さあ、見てみよう。どんな娘たちが集まっているの
か」

エリアス

「こちらでございます」

ハガイ

「決められた通りにしているか？」

エリアス

「はい。へガイ様。ただいま六カ月の没薬の油を用いて
いるところでございます」

へガイ

「そうだ。そういう規則だからな」

エリアス

「その後、香料、化粧の品々を用いて6カ月、十二カ月
後に王様のところに上がることになっています」

ハガイ

「娘たちには化粧でも衣装でも、何でも好きなものを好
きなだけ与えるのだ」

エリアス

「はい。お言いつけ通り、そのようにいたしております」

ハガイ

「何故、そんなにも長い準備期間が必要だかわかる
か？」

エリアス

「さあ、昔からの決まりだからとしか」

ハガイ

「女というものは、控えめに見えても財力と権力をえら
れたら急変するものだ。だから今のうちに欲しい物を何
でも与えて、本性を知っておく必要がある。」

エリアス

「なるほど。全くもってその通りでございます。」

ハガイ

「これだけの大国のお妃になるということは、並大抵の
ことではない。美しく賢いのは当然、あらゆる誘惑や人
に惑わされることのない、人格の優れた者でなければな
らない。国中から選んだ最も優れた方をお選びになる
ということはそういうことだ。」

エリアス 「はい、ごもっともでございます。」

ハガイ 「いかに見た目が魅力的であっても、人格が伴っていなければ、決して王様に推薦してはならない。」

エリアス 「はい。畏まりましてございます。」

ハガイ 「それぞれの人格をよく観察するのだ。」

エリアス 「はい。畏まりましてございます。」

ハガイ 「今、私の言ったことを、娘たちには知られないように観察するのだ」

エリアス 「ごもっともでございます」

ハガイ 「ちょっと待て。忠告してやることは構わない。いくら忠告しても、人とは一朝一夕に変わるものではないがな」

エリアス 「はあ、6ヵ月でももう十分な気もしますが…」

シリーンとサマンは、衣装部屋にいる。

シリーン 「退屈だわ。12ヵ月間もここから出られないだなんて。」

サマン 「わたしもよ。こうして衣装部屋にあるドレスを、片っ端から試着するのが何よりの慰めだわ。」

シリーン 「そうね、靴も帽子も宝石も本物ね、さすが王宮の間だわ。」

サマン 「王妃になったらどんなに贅沢できるのかしら。退屈な時はわたしそのことを考えるの。」

シリーン 「どうしたら王様に気にいられるのかしら。」

サマン 「誰がみてもさすがって思われるような洗練された美しさが必要だわ。王様のところへ行くまでに、もっともっと美しさを磨かなければ」

シリーン 「お父様もお母さまもわたくしに期待しているのよ。お前は美しいからきっと選ばれるって」

サマン 「わたしもよ。」

パリーとゴルネサは、ダイニングに居る。

パリー 「退屈だわ。12カ月もここから出られないなんて。」

ゴルネサ 「わたしもよ。でも、ここには、いろいろな国の珍しくて美味しい料理を作れるシェフがいてよかったわ。」

パリー 「ここでの食事は王様の食事と同じものが分けられているらしいわ。」

ゴルネサ 「ぶどう酒もそうかしら。本当においしいわ。」

パリー 「それはそうよ、国中で一番のものが王様に捧げられるのだもの。」

ゴルネサ 「葡萄酒を飲んでいる時は気持ちが晴れるのよ。」

パリー 「わたしもそうだわ。お妃候補なんかより、早く家に帰りたい。」

ゴルネサ 「酒蔵へ行って何か探しましょうよ。どれでも好きなだけ飲んで構わないっていわれてるわ。」

パリー 「わたしっていくらでも飲めるのよ。どれでも好きなだけっていわれたらいくらでも飲んじゃうわ。」

ゴルネサ 「大丈夫よ。王妃様になったらきっとたくさんパーティーに出なければならないわ。そのための練習よ。」

パリー 「今夜は、これにしましょうよ。」

ナヒードとパルヴィーナは、トランプ占いをしている

ナヒード 「退屈だわ。あと12ヶ月もここから出られないなんて。」

パフヴィーナ 「今日も占いをして過ごしましょうよ。ここでは、呼ばなくたって次から次へと占い師の方から来てくれる。」

ナヒード 「王様にどうしたら気にいられるかって。そうそれを占い師に聞くのよ。」

パフヴィーナ 「私の前世はエジプトの王女。王様の生まれた日と私の生まれた日。相性はいいみたい。」

ナヒード 「ヴィーナスの星が出てるわ。でもまだ確信できないわ。今日また別の占い師を呼んでいるの。」

乙女たち、3組並んで、パントマイムを続ける。

その間エステルは、ずっと書物を読んでいる。

3組の娘たちを眺めながら歩いて来たヘガイが、エステルのところで足を止める。

エリアス 「この娘は、化粧も楽しまず、肉も食べません。書物ばかり読んでいます。」

ヘガイ (覗き込んで) 「ほう、王国の年代記ですか？そんな書物に興味をお持ちだとは珍しい。あなたの先生は誰ですか？」

エステル 「はい、私は…いえ、先生など居りません。ここでしか読めないものに違いないと思って、偶然にみつけてみているだけ…でございます。」

ヘガイ 「その通りです。このような書物はここにしかありません。本が好きなのですね。それではもっと若い女性が好むような物語も取り寄せておきましょう。」

エステル 「いいえ、わたくしは、これで十分でございます。」

(ひそひそ声で聞こえるように)

シリーンとサマン 「本なんか読めたって意味ないわ。女には意見を求められることなんてないのよ。女はやっぱり見栄えよ。ドレスも化粧も楽しまないなんて、これまでどんな暮らしをしてきたのでしょうか？」

パリーとゴルネサ 「肉もお酒も楽しまないだなんて。もったいないわ。楽しいことが好きではないのね。」

ナルードとパルヴィーナ 「自分がどんな星の下にあるのか知るべきよね。」 (二人頷く)

4. 育ての親

王宮の庭。エステルが王宮に行ったことを知った育ての親モルデカイは、王宮での仕事を得て、エステルに会いに来た。

モルデカイ 「ハダシャ。ハダシャ。ハダシャ。お前の名前は、私たちの故郷に咲く小さな純白の花の名前。ああ、ハダシャ、私の小さなハダシャよ。幼い頃に両親を亡くし、わたしが引き取って育てた娘。何故、王の花嫁候補になぞなることを選んだのか。権力というものが如何にあやうく、人を操るものなのか。かわいいお前にはそんなものにはかかわってほしくないのだ。」

エステル 「お父さん！」

「どうしてここに」

モルデカイ 「ここで働くことになった。門番小屋に寝泊まりできる。手紙の分類をする仕事だ」

エステル 「そんな。門番小屋だなんて。あなたの教えを必要としている生徒たちが沢山いるというのに…」

モルデカイ 「…まあ当分仕方がないさ。」

エステル 「…あなたの言いつけを守らずに来たのだから見放されても仕方がないと思っていました。」

モルデカイ 「自分を責めてはいけない。始めたことはやり抜くがいい。これも神のご計画の一つに違いない。心配しなくていい。わたしに会いたければいつでも門の傍まで来るといい。わたしはいつもそこにいるよ。」

エステル 「ごめんなさい。一人でやれると思ったわたしが間違っていました。」

モルデカイ 「いいんだ。きっとお前にはここでしなければならないことがあるに違いない。もしかしたら私たちの仲間を救うことになるかもしれない。助けが必要なときはいつでも言いなさい。ただ、そのことを誰にも知られてはならない。エステルと名乗っているだろうな？ハダシャという名前は、お前の民族が知れてしまうから決して明かしてはならぬぞ。」

エステル 「はい。分かっております。」

モルデカイ 「そうだ。決して明かしてはならない。王様は差別しないということになっっているが、城中全ての人々が心からそう思っているわけではないのだよ。私たちの民族の名を明かせば、よく思われないことは確かだ。」

エステル 「分かりました。気を付けます。わたくしたちの民族のことを、本当は、あなたのことを語りたいのです。あなたのような賢者が居ることを。ただの教師や門番ではないことを。」

モルデカイ 「そんなことは言うてはならない。さあ、もう行きなさい。」

エステル 「…」

モルデカイ 「大丈夫だ。そんなことを気にするな。お前の選んだ道を行くがいい。さあ、行きなさい。誰かに見られるといけない。」

(エステル何度も振り返りながら退場)

モルデカイ 「ああ、私たち民族の神よ。どうかあの娘をお守りください。」

5. お妃選び

シャジガズ 「王様、お妃候補の娘たちはいかがでございますか？」

王 「フム。何だかどの娘もどこかで見かけたことのある娘に見えるな。国中から選んだというのは本当か？」

シャジガズ 「はい。しかしやはり地方の娘は何といいますかやはり、都の娘にはかなわないのです。」

王 「私は国中から探すというから認めたのだが。しかし来たのはスーサの娘ばかり、それも大臣の血縁の者ばかりなのじゃないか？」

シャジガズ 「まさか、そんなことはございません。公平に選んでおりますので。」

王 「大臣の娘たちはそんなに王妃になりたいのか。娘を王妃にしてわたしに何かさせようとも企んでいるのか。」

シャジガズ 「まさか企みなどとそんな。滅相もございません。」

王 「よくよく考えればワシュティでよかったのだ。しかし周りがうるさいからこうなった。」

シャジガズ 「王様はまだ、本当のお相手にお会いになっていないだけなのです。」

「後一名残っていますが、いかがいたしましょうか？」

王 「まあいい、通すがいい。」

エステル、王の居室に入る

王 「残念だが、王妃選びは取りやめることになった。お前は家族の元に帰るがよい。」

エステル 「恐れながら、わたくしには家族がございません。」

王 「それでよくお妃候補の中に紛れこめたものだな。」

エステル 「畏れながら、花嫁候補は国中の娘たちの中から、家柄や出身にかかわらず、平等に集められたのではなかったのですか？」

王 「ハハハそのはずだったが。どうやらそうではないようだ。」

エステル 「神がお授けになったどのような妨害があったとしても、あなた様のご意思が実現されますように。昔から何処の国でも王様は近隣の国との婚姻関係を結ぶことで国の安泰を図るものです。賢いことで有名なかの国の王様も、何百人もお妃を迎え、かえってそのために国が亡びることになりました。」

王 「お前の言う通りだ。我が王国は近隣諸国の王の機嫌をうかがうことなど必要としていない。我らの敵は身内に居るのだ。」

エステル 「どうかあなた様ご意思を国を治めることに関わる全ての者が理解することができますように。そしてあなた様が永遠に生きていきますように。」

王 「お前は帰らなくてよい。婦人の間に留まるがよい。また明日、お前を呼ぶだろう。王の命令だ」

エステル 「あなたの憐み深いお言葉に感謝致します。」

6. 暗殺計画

王妃の服を着たエステル。侍女1, 2, 3、が、支度をしている。

侍女1 (侍女2に) 「もう少し低く結ってね。王様からのお言いつけがあればいつでも冠をかぶることができるように。」

「エステル様、今夜の酒宴であなた様は正式に王妃とされますが、この老女の言うことをどうかお聞きください。以前、前王様がおふれを出したように、妻は夫の言う通りに従わなければなりません。ご自分のほうから王様にお声をかけてはなりません。そうでなくとも、王様はご公務でお忙しくていらっしゃるが多いのですが、決して何か勘ぐったりなどしてはなりません。

それから、決して宮中に入りになされるご婦人たちの噂話などにのってはありません。ワシテ様は、そのために離縁されてしまいました。それから、あなた様は本を読まれるのが好きですが、決して王様に何か意見してはなりませんよ。王様は、あなた様によくすることも悪くすることも王様のお心次第です。奥方様に政事の件でご意見されることを嫌いますので。」

エステル 「ご親切、ありがとう。気をつけます」

侍女1 「男でも女でも、召されないのに中庭を歩いて王様の元へ行った者は殺されるという法律がございますので覚え

ておいてくださいまし。但し、王様はその者に金の笏を伸べれば殺されずに済みます。」

エステル

「でも、召されもしないのに、王様のもとへ近づくなどということはまずないと思いますわ」

侍女1

「まあ今はあなた様は王のご寵愛を受けていらっしゃるから想像もつかないかもしれませんが、ワシテ様はその衝動を抑えるために大変な苦勞をしていらっしゃる。どうぞこのことを心にとめておいてくださいまし。」

エステル

「ありがとう。心に止めておきます」

侍女1

「さあ、支度が出来ました。宴会の間の方へどうぞ。あなたたち、お共するのよ」

侍女2, 3

「はい。」

エステル

「どうぞよろしくね。私は祈ってから行きます。ドアの外で、少し待っていてください。」

侍女1, 2, 3、

「はい。王妃様」

(侍女退室)

エステル立ち上がり辺りを見回してから、バルコニーに降りる。

モルデカイ

(柱の陰から現れる)

エステル

「会えてよかった。わたし、王妃に選ばれたのです。」

モルデカイ

「知っているよ。いいんだ。お前には家族はいないことになっているのだから。」

エステル

「あなたの娘であることを人前で言ってもいいでしょうか？王様にだけでも。王様は、民族や家柄で人を判断しないお方というのは本当です。もう王妃になったのですから、私の出身のことを話してもいいでしょうか？あなたのことを話して、あなたをしかるべき役職につけても

らって、きちんとしたへやで寝泊まりさせてもらえるようにします」

モルデカイ 「止しなさいエステル。私のことなど心配しなくてよい」

エステル 「でも…」

モルデカイ 「そんなことより、大事な話がある（辺りを見回し、声を潜めて）、王の命を狙っている者がいる。王の部屋の戸を守るピグタンとテレシを見張るんだ。そうすれば全て分かる。侍従たちに急いで伝えるんだ。いいな。頼んだぞ」

(モルデカイ去る)

7. 謀反の暴露

高い柱の間。王座に座るアハシェロス王の後ろにビズタ、ハルボナ、メホマン、ピグタ、アバグタ、セタル、カルカスが控える。

大臣たち、カルシナ、セタル、アダマタ、タルシシ、メレス、マルセナ、ムムカンが控える。

アハシェロス王 「今後、ギリシアへの出兵から資金を引き揚げ、そして新しい都の建築を再開することにする。各自、そのためのプランを提出せよ」

カルシナ 「得策だと思います。いくら遠征しても賠償金が得られるわけでもなく、領土が広がるわけでもありませんし」

タルシシ 「恐れながら、既に次の出兵の準備は整っております。マルドニオス様亡き後、王様直々に陣頭指揮をとっていただけるものと思っておりました」

タルシシ 「兵士たちにはテーバイを取り戻せと志気を高めてまいりましたのに。」

カルシナ 「しかし、我が軍の攻撃によって、ギリシアの小都市どもをかえって結束させることになっているという話もある」

タルシシ 「結束など上辺だけのこと。あれから益々反目互いに反目が深まっているのだ。この機会を逃す手はない。」

カルシナ 「例え勝っても、船を借りたフェニキア人たちに散々に持っていかれることが分かっている以上続けて一体何になるんだ」

タルシシ 「それでも船を一から作るよりは、陸の要所を占めるわがさらに地中海貿易までも一手に握れば、莫大な富が手に入ることは間違いないというのに」

カルシナ 「それでも、面倒な海の奴らを相手にしている隙に、陸の要所を奪われては元も子もない」

アマデタ 「私も賛成です。先王様のご事業を継続されるのは大変すばらしいことでございます。帝国中の最も優れた職人を集め、儀式を執り行うのにふさわしい荘厳な石の柱を幾つも作らせましょう」

タルシシ (独言) 「戦況が厳しい戦いであれば、船の使用料はいくらでも払う。新しい都などに、大事な戦費を持っていかれてはたまらない。フェニキアの奴らからいつ船を出すかと催促が来るばかりだ。これでやめられたら、顔がたたない。これまでの苦労が水の泡だ。フェニキアとの約束はどうなる？兵士たちに対しても全く顔がたたないぞ」

(独白) 「私の祖父は建国に貢献のある家臣。本来ならば領地を与えられていたはずであるのに。王は領地を分け与えようとしなない。

もし、謀反が成功したのなら、私が王の代理人となってギリシアと勝つまで戦うだろう。なに兵隊を動かすのはわたしだから。しかし、今、反対だと突っ張ることは得策でない。ここでは、はい、はい、と言っておいて、ピグタンとテレンの策略を早くすすめるのだ。王の命令で兵隊たちを引き上げる前に私が権力を握るのだ。

メムカン

(独白) まずい。王は、神殿建築のためにしまっていた筈の金のことを尋ねるだろうか？後で埋め合わせようとして使ってしまったのはまずかった。私が拝借したのはわずかな金額だから、賠償金をもらったらそのどさくさに紛れて金庫に戻しておこうと考えていた。まさかあれだけ戦争のために支出しておいて、何も得られないうちに出兵をやめるだなんて思いもしなかった。ピグタンとテレンの策略はいつ実行するんだ。上手くいったあかつきには、私が国中の財務の全てを掌握して欲しいままにできるのだ。

タルシシ

「異存はございません」

メムカン

「異存はございません」

(大臣たちは顔を見合わせ、ヒソヒソと議論している)

王

「宜しい。それでは、ハマンを呼べ」

ハマン

「ここにございます王様」

王

「わたしは、しばらくペルセポリスに滞在する。その間、ハメングダダの子ハマンを総督官として、新しい都の建設責任者として、工事の調整から資金調達まであらゆる権限を与える。」

財務大臣

「お、恐れながら王様。それではハマンでは、経験不足かと、そのような権威をお与えになられるとはいささか承知しかねます」

カルシナ

「王様、財務大臣を差し置いて何故そのような・・・」

タルシシ 「まさか先々代の王の代から仕えてきた私どもに勝る権威を、ハマンなどに与えるとは。」

カルシナ 「まさか、私達にご不満でも」

(近衛長カルカス入って来る)

近衛長 「モルデカイからの通報により、王様、昨夜、大胆にも、王様の寝室の番の役目にある者この二名を調べましたところ、王様を暗殺しようと図っていることを白状いたしました。」

王 「そうであったか。ご苦勞であった。」

ピグタン、テレシ、縛られて引かれてくる。

タルシシ 「王様は、大臣との会議中であるぞ。」

王 「私が命じた。謀反の罪は大臣であろうと旧くからの家臣であろうと、裁かれなければならない」

ピグタン テレシ 「大臣様。申し訳ございません。」

タルシシ 「言いがかりでございます」

近衛長 「裁判で訴えて下さい」

(タルシシ、メムカン、が捕らえられる。)

8. ハマンの家の宴会

(ハマンの家ハマンとハマンの妻セレシ、友人1、2、3、ハマン、妻のセレシ、友人1、2、3、テーブルを囲んでカードをしている。)

ハマシ 「ハハハハハ。幸いとは巡り巡るものだ。これからは、このハマシを総督官として、金の製造から神殿建設の資金調達まで全ての権限を与える。とおっしゃったときの大臣たちの顔ときたら」

友人1 「ペルシア帝国やり方は、バビロニアの統治とは違ってペルシア人でなくても能力があれば家来にしてもらえるんだとは聞いていたが、いきなりお前がそんな特別な昇進をうけるとはな。」

友人2 「大したものだな。さすが大帝国だ。」

ハマシ 「財務大臣の一族の者どもが慌てて泣きついてきたよ。今までのように通行税を払わないで商売が出来るようになってさ」

友人2 「やっぱりそうだったのか」

友人1 「それでお前何て言ったんだ」

ハマシ 「会わなかったさ。これからはそいつらからきっちり通行税をとるようにというのが王様のお言いつけだ。」

友人1 「なるほどそれでお前が選ばれたのか」

友人2 「これまで偉い方々にはご縁がなかったからな」

友人3 「あいつらからはたっぷり取ればいい、今度は俺たちアガグ人だけを免税にすればいい」

友人2 「それじゃあ、クビになった大臣と同じことをするのか？」

友人1 「大丈夫だよ、ペルシアやメディア人の大臣たちに比べたら、大したことないさ。規模が違うよ。アガグ人なんてほんのちょっとしかいない。」

友人2 「せっかくの地位を一族のために恩恵のひとつも取らない家臣なんてそんな訳ないよな」

友人3 「そりゃあそうさ」

ハマソ妻 「この広い国のどこかで帳尻を合わせるくらいは訳ない
でしょうよ。何しろ大変なご信頼を頂いているのですか
ら。」

ハマソ 「いやもちろん、少しぐらひは何とかなるさ。王様が
決めた金額を、国のどこから集めてもいいんだからな。
出来ないことはないさ。」

友人3 「しかしな、ヘブライ人にだけは気をつけるよ。奴らは、
関係ないことに口を出して、王様に言いつけたりするの
が得意だからな。」

友人1 「そういや、ピグタンとテレンが捕らえられたのも、や
らせようとしていた大臣が逮捕されたのもあいつらの密
告だったっていうじゃないか。」

ハマソ 「モルデカイという男だ… 何か褒美や爵位でも受けら
れるとでも思ったのかもしれんが、昇進を受けたのが、
わたしだからって、妬んでいるのか、わたしが通っても
頭一つ下げやしない。自分だけが正しいような顔をしや
がって。」

友人3 「その名前なら間違いなく、俺たちアガグ人の先祖代々
の敵ヘブライ人だ。」

ハマソ妻 「あの人たちの先祖がどうだか知りませんが、せつか
く得た地位なんですからそんなひとたちに、出し抜かれ
るようなことのないようにね。」

ハマソ 「勿論さ。俺に頭を下げないとどういふ目にあうか思い
知らせてやろう。」

暗転

モルデカイ の 叫び声、服を引き裂き、灰をかぶり歩く姿が浮かび消える。

9. この時のために

エステルの部屋 侍女1. 2. 3.

侍女3が立派な箱を召し上げ、入ってくる。

侍女3 「王妃様、お祝いの品が届いております。お部屋においておきましょうか？」

侍女2 (手に取って) 「わあ、なんて見事な刺繍なのでしょう。エチオピアの金糸、真珠。」

エステル 「お返しして下さい」

侍女 「ご結婚のお祝いとのことですが」

エステル 「私から王様に何か取り次いでほしいと思っていられるのかもしれませんが、私にはそのような力は何もないと伝えて下さい」

侍女2 「そんなことは気にしない方がよろしいですわお妃様。せっかくはるばる遠くから持ってきて下さったのだからいただくだけいただいでおけば」

侍女1 「あなたお妃様になんということ。王妃様お許し下さい」

エステル 「気にしなくていいのよ。けれど決して受け取らないで下さいね」

侍女2 「かしこまりました王妃様」

エステル 「近頃、ヘガイ様のところに遠くから訪れる人が増えていますね」

侍女2 「はい、王様の命令で、娘たちが集められています。王妃様たちの時もそうでした。たいていの娘さんたちの親御様たちは、私たちにまで色々とお気遣いを頂いて。贈

物も頂いたものです。でもエステル様がお受け取りにならないのなら、私たちも受け取る訳にはいかないわ。」

侍女1 「当たり前でしょ。返して来なさい」

侍女2、3 「はい」

侍女1 「あの娘たちの言うことをどうかお気になされぬよう」

エステル 「大丈夫よ。気になどとめていないわ。」

侍女1 「王様は近頃大変お忙しいようで。よくあることですわ。もし御入用であれば、よく当たる呪い師をお呼び致しますよ。以前、ワシテ様もご相談になられたものです」

エステル 「わたくしには必要ありません。私には信じる神があり、寄り頼むものは他にありません。」

侍女1 「それで済むのでしたら宜しうございますが、夫の心を思い通りにできる媚薬もございますので、必要とあらばいつでも」

エステル 「もう下がっていいわ。一人にして頂戴」

(侍女1 退場)

エステル 「ああ、王宮に上がる前、毎日巻物を読んで暮らした日々。あの頃のわたしが懐かしい。今の私は、王様のお呼びになる日を待ちわびてばかり。心に思い浮かべるのは王様のことばかり。あなた様がわたくしをお気に召さなくなったのなら…全ては貴方様のお気持ち次第。お妃を何人もとることだって、誰が貴方様に禁じることなど出来ましょう。…苦しい。苦しい。どうしたらあなた様は、私を思い出して下さるの？これが愛の苦しさというものなのでしょうか。父も母も居ないわたしが、人を愛することが出来るのでしょうか。愛される資格があるのでしょうか」

ハタク ノック (扉の前で) 「エステル様。」

エステル 「ハタク。お入り下さい。」（急いで涙を拭う）
（ハタク入る）

ハタク 「どこかお具合でも悪いのですか？医者をお呼びいたしましょうか？」

エステル 「いいえ、必要ありません。大丈夫です。」

ハタク 「お聞きになりましたか？婦人の間にまた乙女たちが集められているのですが、そのことでお伝えしたいことがあって来ました。あなた様が王妃になられたのを聞いて、各州にいる家臣たちが全国から選ばれたはずなのに自分たちは聞いていない、ともう一度王妃様選びを行うよう請求したのです。」

エステル 「そうでしたか。」

ハタク 「ところで、どんな娘たちが集まったと思いますか？」

エステル 「さあ、分かりません。」

ハタク 「遠くからは連れてきましたが、やはり官吏の娘とか、碌に選びもしないで 自分の親類の娘を送ってくるばかりなのです。スーサの大臣たちとやることは同じなので…それがあまりにもあからさまで。王様があの中からまた新しいお妃をお選びになられるということはまず、ないでしょう。」

エステル 「そうですか。王様のなさることにはわたくしたちは従うだけです。」

ハタク 「おっしゃる通りでございます。」

エステル 「モルデカイさんからは何か連絡がありましたでしょうか」

ハタク 「そのことなのですが…」

エステル 「何かありましたか？」

ハタク 「門番をやめて出て行ってしまいました。」

エステル 「まさかどうして、わたくしに何も告げずに行くはずがないわ。」

ハタク 「それが…衣を引き裂いて荒布をまとめて、灰をかぶり、町の中で叫んで」

エステル 「衣を裂き、荒布をまとい、灰を被る…どんな悲しみがあったというのでしょうか。」

ハタク 「モルデカイさんはユダヤ人だったのですね」

エステル 「いったいそのことをだれから…」

ハタク 「ユダヤ人を皆殺しにせよという詔がありましたので。でもすぐにじゃありません。アダルの月の十三日にです。これです。見て下さい。」（詔の紙をとり出す）

エステル 「…若い者も年寄りも子供も女も、全てのユダヤ人を根絶やしに死、殺し、滅ぼし、彼らの財産をかすめ奪えそんな…特定の民族を皆殺しにして財産を取り上げるなんて、王様のご意思ではないに違いありません。」

ハタク 「ハマンです。王様から受けた特権を利用してやりたい放題なのです。古くから仕える大臣たちを退けて、利害関係のないハマンが特権を与えられたわけですが、そのハマンも結局は前的大臣たちと同じです。」

「ハマンは、全ての者が自分にひざまづくことを強要するような奴で、門の前にいるモルデカイさんだけは従わなかったのです。それで、あの人の民族に仕打ちを与えようとしているのだと言う人もいます。」

エステル 「ああモルデカイさん。」

ハタク 「アダルの月までにはまだ半年あります。実は、モルデカイさんから、あなた様に、王様の憐みを請うよう言いつかってきました」

エステル 「ああ、ハタク。私はもう三十日も王様に召されていないのです。王の召しを得ずに中庭に入れば死刑になると

いう決まりがありますよね。私から王様の前に出ていくことは出来ません。王様からのお召しを待つばかりの身の上です。」

ハタク

「必ず死刑になるとは限りませんよ。王が金の笏を伸べられれば助かるのです。」

エステル

「それでも…わたくしに王様からのお召しがあるのを待って下さい。王様がわたくしにお心をおかけくださって、お召しがありましたら必ず、お力になれるとお伝え下さい。」

ハタク

「そうですか。それではその通りお伝えします。それでは行きます。」

(ハタク去る)

(雨の音)

エステル

(独白) 「自分の思いにばかり囚われているうちに、そんな大変なことが起きていたのだなんて。…モルデカイさんはわたしに、民族のことは決して誰にも言わないようにと言ったのに…何故今になって、王様に憐みを請えと言うのでしょうか…憐みを請うということは、民族のことを何もかも明かせということではないのでしょうか…明かしてもいい。明かしたい。でも今ではない。王様とわたくしとの関係がこんな状態ではない時、今度、王様からのお召しがあったなら、きっと言うわ。きっと…どうかお召しがありますように」

(雷の音)

(窓の外にモルデカイ姿を現す)

エステル

「お父さまですか？よかった。ハタクから聞いて心配していました」

モルデカイ

「あなたは王宮に居るゆえ、全てのユダヤ人と異なり、難を逃れるだろうと思っはならない。」

エステル	「そんなことは決して思ってもいません。教えて下さい。どうしたら、この難から皆を救いだせるのでしょうか」
モルデカイ	「何故それをわたしに尋ねるのですか」
エステル	「わたくしはもう一カ月も王様からの召しが無いのです。あなたは、以前わたくしに、自分の民族を明かさないうにとおっしゃいました。民族を明かすことなく、王様に憐みを請うなどどうしてできるでしょう。」
モルデカイ	「よろしい。あなたがもし、このような時に黙っているつもりならば、他のところから助けと救いが我々の民のために起こるでしょう。しかし、あなたとあなたの父の家は滅びるでしょう。あなたがここに迎えられたのは、このような時のためでなかったのですか。」
エステル	「…私は、私は、王様がわたしをお避けになられているのではないかと、不安で、不安でならないのです。そんな時にわざわざ、私の立場を不利にするようなことを、自分から言い出さなければならないというのですか…ああ、その通りです。あなたとわたしたちの民に降りかかる一大事について聞いて知っていながら私は黙っていらしてしていました。でも…あなたの言葉で、たった今、目が開けました。わたしたちの民が殺されるならば、わたしも何故生きていられはしないということ…もし本当にそうなったのならば私も必ず死にます・・・これから殺されようというのに、明日のことを心配する必要はないのです。死刑になることの、何を恐れることがあります。わたしは命を懸けて、王の前に行きましょう。私はこの時のために望んで此処に来たのです。」
モルデカイ	「スーサの仲間たちは皆、断食して祈っている。お前のために」
エステル	「ああ、わたしのために。そうでしたよね。私たちはいつも病気の人や困っている人たちのために、断食して祈

ったのでした。スーサの仲間たちにも伝えて下さい。わたしも断食します。祈りを続けて下さい。皆の祈りは、わたしが背負います。」

モルデカイ

「伝えるよ。伝えるとも。」

エステル

「私は命を掛けましょう。私たちの神は恵み深い方であるから。一見、災いにしか見えないことでも、その後には素晴らしい恵みを与えるために、神様が用意してくださったことなのだから。」

雨の音、激しくなる。

暗転

10. 竿

ハマシ

「ともかく地面から上が、50キュビト、周りは石で支えるのだ。人を吊るしても倒れないように頑丈にな。」

宮内兵1

「死刑場の吊るし台みたいなものを王様の庭に作るんですね。」

ハマシ

「ああ、そのとおりだ。ああいうのを作ってほしいのだ。」

庭師1

「今夜、王妃様の宴会のある中庭から見えますが、かまいませんか？」

ハマシ

(憤慨して)「王妃の意見がどうだというのだ。ともかくお前たちはわしの言うとおりに立てればいいのだ。」

庭師2

「すいません親方、50キュビトって何メートルですかね」

庭師1

「お前は黙ってる」

ハマシ 「ハハハ、わたしに逆らうと、この竿に吊るして見せしめにされるぞ、気をつけるのだ」

庭師 1 「ご勘弁下さい。この城の中にハマシ様に逆らう者などおりません」

ハマシ 「当たり前だ。出来上がったら試しにお前がぶら下がってみるのを忘れるな。足を振って動かしてもかたむいたりしないかどうか必ず確認しておくのだ。」

庭師 1, 2, 「はい。ハマシ様」

ハマシ 「しかしあれだな。さすが国中から選ばれた王妃様だ。お姿が美しいだけでなく、心の美しい勇気あるお方だな。王様のお呼びもないのに、命を懸けてまで王様の中庭に入って来たのだよ」

庭師 2 「それはよっぽど大切なことがあったのでしょうかねえ」

ハマシ 「そうなんだ。それで王様に何を懇願するかと思えば、このハマシのために王様との宴会を開いてくださるといふのだよ、私の他には誰も招待されていないのだから間違いない、まぎれもなく私のためなのだ。」

庭師 1 「それは大変に結構なことで」

庭師 2 「王妃様は本当に美しくて勇気のある方です」

ハマシ 「まあ、お前たちは、早くこの竿を建ててしまってくれ。許可なく城の中庭に入ってきた者は吊るす。昔、働いてましたなんていうのも駄目だ。」

庭師 1, 2 「へい。ハマシ様」 (深々とおじぎ)

11. エステルの宴会

ハマシ、エステルの座っている席に着く

ハマシ 「お妃様には、ご機嫌麗しく、お招きにあずかり誠にありがとうございます」

エステル （会釈）

（王、侍従らと共に登場、着席する）

王 「さあ、（エステルに）話してみよ、エステル。お前の望みどおり、ハマシも同席している。そなたは世の信頼する者。聡明なお前が命をかけてまで中庭に入って来てまで設けた酒宴の席でお前は何を言いたいのだ」

エステル 「王国はあまりに広く、あなたの権威はあまりにも大きい。正しいこと、裁かれるべきこと、何一つとしてあなた様の思いのままです。これからわたくしの申し上げのことを、どうぞお裁き下さい。あなた様の心からのご判断であれば、どのような裁きでも受け入れる覚悟でございます」

ハマシ 「王妃様。もしかして、褒美を与えるよう王様に推薦したい方がいらっしゃるのではないですか？」

エステル 「仰るとおりです。わたくしが申し上げたいのは、褒美を受けるべきものが褒美を与えられず、受けるべきでない者が受けているということです」

王 「それはいったい如何なることか。申してみよ。」

ハマシ 「さあ、受けるべき者とは一体誰のことをおっしゃりたいのですか？」

エステル 「このことです（紙を差し出し）子供も女も、全てのユダヤ人を根絶やしにし、殺し、滅ぼし、彼らの財産をかすめ奪え。と書いてあります」

ハマシ 「それがどうしたと言うのです？あなた様は王様によって与えられたわたしの権限にケ、ケチをおつけになられる気ですか？王様、どうぞいかに王妃様といえども、王様の権威で定められたことにケチをつけるようなことは許されません。どうかお聞きにならぬよう」

エステル	「王様、王様のご判断によりお裁き下さい。子供も女も根絶やしにし、財産をかすめ取る法律に王の印が押されて発令しているのです」
王	「ハマ、それは誠か？」
ハマ	「いえ、確かに、しかし、誤解がございます。わたくしの申し上げるあの民は確かにこの国にとって有害な民族なのであります。わたくしは、国民の意見を代表し、確信のもとにですわね・・・」
王	「民族と文化を尊重することは帝国の誇りである。法律がこれに背くものでないことを証明してみよ」
ハマ	「このハマ、王様のご厚意にお答えするべく精神誠意努めさせていただいております。わたくしめに限り、王様のご意向に背くような行いは決してないということを信じていただきたく」
エステル	「ユダヤ人の財産を奪うのは、あなたとあなたのお友達が誤魔化して着服してきた国の金を埋め合わせるためですか？アガグ人に頼めば、通行税を払わないで済むということを知っています。 こんな筈ではなかったのです。分からないようにすこしだけやるつもりだった。けれど気づいた時には、仲間たちを制御することができなかった。いいがかりをつけて、一つの民族を殺し、恨みついでにその財産を根こそぎ没収し、ごまかした税収の帳尻を埋め合わせようとしているのです」
ハマ	「それこそ、まったく根も葉もないいいがかりでございます。」 「あなたに頼んで、税金を逃れていた商人たちが、あなたにあってお話したいそうです。皆、現行犯で捕らえられました」

商人1 「話がちがうじゃないか。高い相談料とっているくせに」

商人2 「ハマン様、まさかわたしたちが牢屋に入れられるのではないですよ」

商人3 「こういう時のための仲間だろう」

侍従 「見苦しいぞ。王様の前だ」

王様 「そのまま法廷へ連れていけ。王の権威を利用して稼いだものは全て没収する」

ハマン 「王様、わたしの代わりにどのような者をお立てになっても同じことが起こるでしょう。多少の賄賂は昔からあることです。必ずお約束の金額は集めてみせます。こいつらとわたしは関係ありません」

商人1 「人でなし」

商人2 「よく恥ずかしくないな」

商人3 「自分だけ助かろうっていうのか」

侍従 「王様の前だ。口を慎め」

ハマン 「待って下さい。王様は、わたくしを大臣たちの上に席を占めさせてくださったのではなかったのですか。王の侍臣は皆、わたくしにひざまづくようにと仰せになりました。王様から権威を受けたわたくしがこんなことで罪人にされていいものなのでしょうか」

ハルボナ 「あなたが王様から受けた権威は全ての人のために、正しく使わなければならない。そうでなければ取り去られなければならない」

ハマン 「正しく？正しくとは？罪人、罪人はあの民です。見て下さい、門のところに座っているモルデカイという男、あいつは、王様の命令を守らず、わたしに頭を下げなかった。わたしが何度も言ったにもかかわらず。わたしを罪人だというのなら、王の命令に従わないあの男、王か

ら賜った権威に従わないあのモルデカイ、裁かれるべきはあの男ではないのですか！」

ハタク 「あなたが本当に王様の権威に従っていたなら、モルデカイは頭を下げないことはなかったでしょう」

ハルボナ 「モルデカイさんは、王様のために良いことを告げたのに、どんな栄誉も、爵位も何一つ求めることがありませんでした。」

王 「ハマンの指輪を取り上げ、モルデカイに与えよ。」

ハマナ 「お待ちください王様。あそこに竿を立てたわたくしの気持ちを分かっただけですか！あの時、王様が大臣をとらえて大臣の座から外し、わたくしをとり上げて下さった時、どんなに喜ばしいことだったでしょうか！あの日から、わたしのあなたに対する忠誠、王の命令に従わない者を排除することを誓ったのです！」

侍従 「喜ばしかったのはあなたとあなたのお友達仲間だけでしたね。それももう終わりです。あなたは王のためと口先で言うだけで、自分の都合しか考えていない」

王 「今すぐ、あの庭の隅にある竿にハマンを掛けよ」

ハマナ 「恐れながら王様。あの竿はわたしを吊るすためのものではありません。あそこにわたしを吊るすのは大変な間違いです。断言します。この国のために、見せしめにするべきなのは、ユダヤ人です、モルデカイです！」

エステル 「モルデカイはわたくしの父親です。ユダヤ人はわたくしの民です！」

7人の侍従が入ってきてハマンの指から指輪を抜こうとする。抵抗するハマナ。

ハマナ 「渡さない。この指輪だけは絶対に。」

(揉み合った後、指輪を取り上げ、抵抗するハマナを木にかける。)

どうか命だけはお助けを。やめろ、放してくれ。やめろ、やめろ、ワー

1 2 絶望が喜びに変わる日

市民 1 「何故私たちだけが殺されるのでしょうか」

市民 2 「本当に皆殺しなのでしょうか。幼い子供たちだけでも助かりませんか？」

市民 3 「酷い。どんな過ちも犯していない。どんな扱いを受けてもただひたすら耐えてきたというのに」

市民 4 「祖国があったなら、わたしたちこんな目にあわなくて済むのに。」

(一同、すすり泣き)

祭祀 「集まって祈っていきましょう。我々は、こうして街の中の集会場に集まることが出来るのですから。祖国を建て直すために先に帰国している仲間たちのために祈りましょう。城壁のない街に住んでいる彼らは、我々よりもずっと不安なのです。何処から敵がやってきても逃げ隠れる場所がないのですから。受入れましょう神の与える試練を。私たちの祖国は滅ぼされてしまったが、神は我々を滅ぼしはしないと約束になった。神は必ず約束を守るお方です。門の前まで敵は迫っています。それでもずっと祈り続けるのです。」

(門の扉を乱暴に叩く音)

使い 「ここを開けなさい。王様からの使いだ。(王様からの手紙) この度、着任されたモルデカイ宰相によって、アダルの月の十三日の一日のうちに、若い者も年寄りも子供も女も、全てのユダヤ人を根絶やしにし、殺し、滅ぼ

し、彼らの財産をかすめ奪えという、勅令は取消しとされた。（紙を貼りつける）

（人々恐る恐る外に出て、貼り付けられた紙を読む）

市民3 「本当なの？」

市民4 「モルデカイさんが、宰相に！」

市民2 「助かったのだ！」

人々（歓声） 「本当だ。神は我々を救って下さった！」

祭祀 「辛い日が喜びの日になったこの日を祝おう」

人々 歓声

エンディング